

V-2

多発性骨髄腫治療の現状 骨髄腫研究会・治療の実態調査よりー
(会長要望講演)

島崎千尋¹、村上博和²、高木敏之³

京都府立医科大学血液・腫瘍内科¹、群馬大学医学部保健学科応用検査学²、
千葉県がんセンター医療局³

【目的】近年の骨髄腫(MM)治療に関するガイドラインでは、自家末梢血幹細胞移植(auto-PBSCT)は65歳未満の若年者に対する標準的治療に位置付けられている。しかし、本邦におけるMMに対するauto-PBSCTの現状は明らかではない。そこで、auto-PBSCTを中心としたMM治療の実態を明らかにすることを目的とした。

【方法】日本骨髄腫研究会会員を対象にアンケート調査を実施した。2001.1.1~2004.12.31の4年間に新規に診療したMMを対象とし、症例数とauto-PBSCTを含む治療の実態を検討した。

【結果】28施設より回答を得た。症例数は962例で、auto-PBSCTの対象となる65歳未満の症候性骨髄腫(IMWG基準)は318例(33.1%)であった。このうち初回治療としてauto-PBSCTが実施された症例は137例(43.1%)であり、解析し得た126例の3年生存率は74%、無進行生存率(PFS)は37%、早期死亡は2例(1.6%)であった。二回移植はのべ49回(自家36回、同種13回)行われ、40例で移植後サリドマイドが使用されていた。移植未実施(181例)の理由としては、患者自身の問題(70例)のほか本人の希望(33例)、施設の移植環境、施設の方針、採取不良などがあり、その場合、治療としてVAD(82例)、MP(35例)などが行われていた。

【結論】おおむねガイドラインに則った治療が行われていた。初回auto-PBSCTは適応症例の50%以上に行われているが、PFSは必ずしも良好とは言えず、新しい治療戦略の開発が必要である。